5 MAY, 1988
昭和63年(1988年)5月10日 教皇様の声 (昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
毎月10日発行 第97号

教皇様の声

■五月十八日は教皇様のお誕生日です。

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
© 1988
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

ピラールの聖母

霊的巡礼 ❶

◉聖母マリアを求めて続ける本日の心の巡礼は、スペインのサラゴサという町にある（柱（ピラール）の聖母）へと向かいます。数年前私は、かの地を訪れることができ、「心配事のある子供として聖母マリアの聖なる柱の前にひざまずきたいという望みを果たせました。」（八二・十一・六の説教）

エブロ川の河畔に建てられたこの尊い聖所は、イベリア半島に福音の教えが伝えられて以来、栄光に満ちた聖母マリアの姿の象徴となっています。この地方に古くから伝わる話によれば、聖母マリアはサラゴサの使徒ヤコボの前に姿を現わし、彼を励まし、使徒としての宣教のための助けと取りなしを約束されたということです。しかしそれだけではありません。聖母の御保護の象徴として大理石の柱をお残しになり、その柱は何世紀もの間、聖堂で心を込めて保存され、その名が聖所の名称となりました。

以後スペインで「サラゴサの柱（ピラール）」として知られてきた聖所は、「スペイン人の堅固な信仰の象徴」（前述の説教より）とみなされ、また使徒の教えを通じてキリストを受け入れるための道を示す所となっています。この意味で回勅『救い主の御母』に次のように書いた事柄には特別な意味があるのです。「地上の諸国、諸民族の中で、人となったみことばであり、世のあがない主であるキリストの秘義を信じて受け入れる人々は、単にマリアに崇敬の心を向け、母としてのマリアに信頼をもって近づくだけでなく、マリアの信仰のうちに自分の信仰の支えを探し求めているのです。」（27番）

ですからあらゆる時代の数限りないキリスト信者がこの柱の聖母を敬ってきました。

スペインのキリスト者はこの（柱）に、昔イスラエルの民を約束の地へ導いた柱と同じものを見ています。（民数の書14・14） だから彼らは何世紀もの間、「私たちを導く柱がある」と唱えてきました。（柱の聖母マリアのミサ、入祭唱参照） 新しいイスラエルである教会が、約束された地・主キリストに向かって巡礼の旅に発つ時、（柱）は私たちを導いてくれます。柱の聖母は「輝ける道標」、「栄光の王座」であり、「元后、あわれみ深き御母」の中の「尊きイエズスをわれらに示し給え」を絶えず繰り返す人々の信仰を導き、また強めてくださいます。

◉「これは、柱の聖母など多くのマリアの像によって示されるようにマリアが常にしておられることです。御子を腕に抱き、道、真理、命として、御子を示しておられるのです。」（前述の説教）

「そして私たちが不幸にも罪を犯して神との友情を失ったときには、罪を赦す力をもっておられる方を本能的に求め（ルカ5・24）、改心、償い、神との和解の場である聖所において、マリアを通じて救い主を求めます。マリアは私たちが生活を改め、堅忍して、善行を続けるための希望を心の中に目覚めさせてくださいます。」（一九七九・一・三〇の説教）

柱の聖母よ、私たちの信仰を増し、私たちの希望を堅固にし、私たちの愛徳に再び火をつけてください。アーメン。（一九八七・十一・十五）

霊的巡礼 ❷ エジプトの聖母

＊本日の私たちの旅の目的地は、エジプトにある聖母マリア聖堂です。

エジプトの聖所は、マテオによる福音書中の記載に見られ（マテオ2・14〜15、19〜21参照）、非常に古くからの伝承でもある「聖家族の旅」につながるため、極めて特別な意味をもっています。

聖家族の旅に関連した聖母マリアの崇敬の地として、まずマタリエの村があります。この村はカイロから少し離れた所、コプト正教会の信仰の中心となる教会が数多く見られる土地で、近くにコプト・カトリック教会もあります。またカルメル会の修道院では聖家族のエジプト滞在を思いつつ、理由の如何によらず、特に迫害を受けて故国を追われ、他国に避難している人々のために、修道女たちが祈りを捧げています。

＊もう一つの聖母崇敬地の中心はカイロ郊外・ナイル河畔にあるメアディの、聖母に捧げられた教会です。何世紀もの間に、また近代にも何度か改造と修復がなされましたが、五世紀に建てられたものと思われます。この教会はコプト正教会のキリスト者に委ねられており、今でも多くの巡礼者が、自らの意向を恩寵に満ちたとりなし手である聖母マリアに委ねるために、引きも切らず訪れています。

＊イスラム教エジプトの最初の首都であった古代都市フォスタートのはずれ、旧カイロ市にある聖セルジウスと聖バッカスの聖所の下に位置する洞窟の中に、聖家族の旅についての記録が残されています。

この小さいが貴重な崇敬の地もまた、コプト正教会の管理下におかれています。古く有名なこの聖所の歴史には、神の母の御保護のもとでのカトリック信者、特にフランシスコ会士の存在と影響が記されています。フランシスコ会士は十七世紀に巡礼者用の宿泊所をこの地に建て、東方正教会の許可を得て聖家族に捧げられた聖堂地下室の祭壇でミサをたてていました。

この聖所はイスラム教徒さえ注目する所となり、破壊されていた小聖堂は十一世紀の有名なサラディン王の時代に再建されました。

毎年六月一日、コプト正教会は聖家族のエジプト到着を記念して、巡礼の旅を組織しています。エジプトのいくつかの聖母マリア聖堂は、聖家族の歴史的存在を記録している点で特別な重要性をもっているだけでなく、様々な信条をもつ信者たちが熱心に訪れるため、教会一致の見地からも昔から、そして特に今日、たいへん興味深い所です。

（一九八八・一・十七）

司教様方の定期訪問とは？

1 親愛なる兄弟の皆さん、司教の定期訪問とは、その始まり以来、何よりもまず孝愛の行為――すなわち永遠の都にある使徒聖ペトロと聖パウロの墓所への巡礼の旅であります。ですから、それは使徒たちの継承者としての皆さん方の召し出しにふさわしく、とりもなおさず皆さんの司教としての使命の源と本質についての、霊的な黙想と内省となるでしょう。こうして皆さんは新たな勇気と信頼に強められ、司牧者としての責務に戻ってゆかなければなりません。聖ペトロと聖パウロのもとで、目に見える教会の、目に見える一致の絆を新たにすることは、当初から定期訪問の不可欠な部分でした。単に墓を、すなわち死者を訪問することのみが目的ではなく、現に使徒ペトロの職についている者との会見ということでもあったのです。そしてこの巡礼は、その内的論理の一貫性ゆえに、教会法に制定された諸国の司教の定期的なローマ教皇訪問となるに至りました。第二バティカン公会議によると、教皇は聖ペトロの後継者として「司教たちの一致と信者の大きな群の一致の見える根拠であり基礎」であります。(『教会憲章』23)　司牧および教職における、使徒たちとその後継者である司教方との霊的な一致には、使徒聖ペトロの現後継者との全き一致が含まれていなければなりません。主が、神の民を養い、兄弟たちを固める務めをお授けになったのは、他ならぬペトロであったからです。(ヨハネ21・15～18、ルカ22・32参照)

『教会憲章』の同じ箇所には、各司教が「おのおのの部分教会における一致の見える根拠であり基礎である。それらの部分教会は全教会の像に似て形造られ…」(前掲書)と述べられています。使徒ペトロの聖務と司教職の本分は、教会をその源泉に一致させ、また地方教会間および信者間の一致を保たせることにあります。特に、地方教会がその歴史と文化に対する意識をますます高め、それらを教会生活に組み入れようと願っている今日、一致のために尽力するという務めはいよいよ重要性を増しつつあると言えるでしょう。そして、これこそ第二バティカン公会議が緊急警告を発した理由なのです。すなわち、「すべての司教は信仰の一致と全教会に共通の規律を促進し擁護すべきであり、さらにキリストの全神秘体(…)を愛するよう信者に教えるべきである。(…)なお司教たちは、普遍的教会の一部である自分の教会をよく治めることにより、諸教会のからだでもある全神秘体のために貢献することは確実である。」(前掲書)

このように、それぞれの司教や司教協議会にとって、定期訪問は地方教会の活動について報告し、普遍教会と教職の最高権威が定めた規律に従って司牧上の責務を調整する、良い機会なのです。(…)

預言的な大胆さ

(…)信仰の一致のために心を砕くとは、とくに「人々がもはや健全な教えを忍ばず、私欲のままに、耳に快いことを聞かせる教師を集め、真理から耳をそむけ、作り話に耳を傾ける」(ティモテオ②4・3)このような時代には、皆さんにとって重荷となることでしょう。けれどもキリスト者の家族を奨励し、形成を与えることが将来の司牧全体の基礎である点に変わりはありません。そのための基本的な事がらは、一九八〇年の司教会議に基づく教皇の使徒勧告『家庭』の中に厳然と規定されています。その勧告の中では、性道徳と夫婦の道徳に関して、信仰の伝統全体に基づき、パウロ六世教皇の回勅『フマーネ・ヴィテ』に述べられた決定がさらに展開されています。そこに述べられた道徳規定に対して疑問をもってはなりません。同回勅が発布された際、他の多くの司教宣言にあらわれたのと同様、幾分かのとまどいがあったことも理解できますが、それにもかかわらず、以後の継続的な発展を見れば、パウロ六世教皇の信仰の知恵から引き出された預言的な大胆さが正しかったことがよくわかります。

避妊を勧めて堕胎をなくそうとするのは明らかに不合理である

たとえば避妊を勧めることによって堕胎(中絶)をなくそうとするのが不合理であることは明らかです。男女間の、おそらく(無害な)関係として避妊を奨励するという考えは、人間の心の自由に対する陰険な否定であるだけではありません。単なるその場限りの非人間的な性を容認する傾向を生み、結局そのような考えを常にもつような心理を育ててしまいます。また最近の方法では避妊から堕胎(中絶)への移行がきわめて容易なことも皆さんはご存じでしょう。

離婚後再婚した人に教会が秘跡を授けないのは、憐れみの欠如ではなく、愛と忠実を守るためである

霊的巡礼 ❸ ドイツの聖母

一致を願ってアルテティングの聖母に祈る

＊ドイツ北部のケヴェレと同様、アルテティングはドイツ南部の聖母マリア信心の最も重要な中心地です。「私たちの敬愛するアルテティングの聖母」と名づけられた聖所において敬われている聖母像は、十四世紀前半に作られたゴシック式彫刻で、御子イエズスを腕に抱いた姿となっています。

＊この地の言い伝えによれば一四八九年、三歳の子供が近くの川で溺れましたが、アルテティングの聖母のとりなしによって息を吹き返し、それ以来、この聖母像への人々の崇敬が始まったということです。悲しみにくれる家族たちへの母性に満ちたマリアの助けにより、とどまることのない巡礼の行列が始まったのでした。巡礼者の群れは、五百年にわたってこの聖所を訪れ、イエズスの御母を訪問し、自らの喜び、悲しみ、悩み、苦しみを委ねています。最初の恩寵を明らかにお示しになってから後も、アルテティングの聖母は何世紀もの間、数えきれないほどの有形無形の恵みを多くの信者に与え、信者たちはこの聖所で捧げた祈りに対する答えを受け、信仰における勇気を新たにし、試練にあっても安らぎを見出してきたのです。

＊当地の修道院にある修士コンラッドの墓を守るカプチン修道会司祭の、賢明で熱心な指導のもとに、アルテティングの聖所は聖母マリアに捧げられた場所として、信者の深い宗教的及び霊的な再生を望む祈りと司牧活動の重要な中心地となってきました。(……)(八七・一・二四)

＊近刊のお知らせ＊
「罪と赦し」(旧題「罪と告解」)重版
「道」　重版

説教・講話・書簡等の抄訳

不思議としるし

キリストシリーズ ⑫

同様に結婚の不解消性、愛から生まれた「はい」という返事の目的も、人類のために厳格に守られてゆかなければなりません。離婚後再婚した者に教会が秘跡を授けないのは、憐れみに欠けているからではなく、愛と忠実を守るためなのです。さらに言うと、単に秘跡を授与しないという点だけが強調されるべきではありません。たしかに授与することはできませんが、それだけなおさら、困難な状況にある人々が教会の愛をより多く受けているということを感じられるような教会の配慮こそが、たいへん重要なのです。「一つの肢体が苦しめばすべての肢体は共に苦しむ」(コリント①12・26)のですから。それが実現して初めて、こういう状態にいるキリスト者にも、なぜ御聖体の拝領ができないのかを理解することができるでしょう。(『家庭』84番参照)

2 こうして、学校やあらゆる段階でのカテケージスが非常に重要になってきます。(…)

さらに極めて重要な点として、司祭職への志願者の神学教育、全般的には神学校や神学部の研究および教育活動があります。神はこれまでと同様、否、むしろ以前にも増して司祭としての仕事を行なう人々をお呼びになっておられるのです。しかしこのような召し出しは、慎重に育まれ、つきそわれ、しっかりとした状態にまで導かれねばなりません。ここに司祭職への志願者の教育と育成に携わる者全員の、恐ろしいほどの責任の重さがあります。(…)

最後にこれと関連して、教会の中核である最も神聖な御聖体(ユーカリスチア)の秘跡と赦しの秘跡に対して、特に皆さんの注意を喚起しておきたいと思います。御聖体(ユーカリスチア)を、決して勝手な儀式にしてはなりません。その重要さは儀式から来るのではなく、御聖体自体からくるものだからです。〈御聖体が正しくとり行なわれた時〉とはどういう時でしょうか。それは、自分たちの好みのやり方を追求するのではなく、司祭も信徒も、本来の教会自体の典礼の要求に完全に合わせよう、そして良心においても、自ら教会に忠実を保とうと努力をする時なのです。また、赦しの秘跡は特に〈個人的な〉パーソナルな面を強調して構成されています。赦しの秘跡は各人の神との最高の出会いであって、神は裁くと同時に赦しをお与えになります。良心の形成と浄化のための唯一無二の機会であるのみならず、各人が罪を克服するために必要な、極めて個人的な赦しを与える機会なのです。ですからこれは、社会にも良い影響を及ぼすものだと言えるでしょう。

これまで述べてきたことすべては私たちを出発点——すなわち教会の一致へと立ち返らせてくれます。聖人たちの共同体、秘跡的権威、今日の世界における神の御言葉の確実な表われである教会との一致です。教会の一致は真理と愛における一致であり、それには基本的な規律における一致も含まれています。そして真理を全うさせる任務は、とくに教皇との一致を保つ司教に委ねられているのです。

信徒の義務

3 (…)一方、信徒は私たち聖職者の世話をうけるだけでなく、洗礼と堅信の秘跡を受けたキリスト者として、教会内で共同の責任を有し、協力する義務を負っています。(…)この責任や協力は、信徒と聖職者との競争や、信徒の聖職者化を意味するのではなく、神がお立てになった牧者の指導のもとに信徒としてふさわしい形で教会の世界的な使命に参加することなのです。(…)

(オーストリア司教団へ、一九八七・六・一九)

◈イエズス・キリストの使命が真実であることを証明するために神がお示しになり、聖霊降臨の日にエルサレムでペトロが証言した〈奇跡と不思議としるし〉を注意深く考えてみると、イエズスは神としての力を自覚し、御父と一体であることを意識しつつ、自らの名によって〈奇跡的なしるし〉をなされたことがわかります。そこには常に「人の子——神の子」の秘義が現われています。その本質は、人間としての限界(主はそれを自由な選択によってお受けになったのですが)や人間が成しうること、知り得ることを遥かに越えたものでした。

◈福音史家の記す一つひとつの出来事の中に、神の秘義の存在をかいま見ることができます。イエズス・キリストはその御名によって奇跡を行なわれました。たとえば「お望みになれば私を治してくださることもできます」と言うらい病人の懇願を受けて、人間として「あわれに思い」、次に神として「私は望む、治れ」とお命じになると、すぐにらい病は消え、「その人は治った」のです。(マルコ1・40~42) 屋根に穴をあけて吊り降ろされた中風の人の場合も同じでした。「私は命じる。起きよ、床をとって家に帰れ」(マルコ2・1~12参照)と。

ヤイロの娘の場合もそうでした。「イエズスは子供の手をとり、『タリタ・クム』と言われた。それは『娘よ、私は命じる。起きよ』という意味である。すると娘は起きて、歩き出した。」(マルコ5・41~42) またナインの死んだ息子の時にもイエズスは、「『若者よ、私は言う。起きよ』と言われた。すると死人は起き直り、ものを言い始めた。」(ルカ7・14~15)

数多くのエピソードを見ていると、イエズスのどの言葉にも意志と御力が表われています。イエズスはそれを内に求め、いわば自然に表現されたのです。人々を治す力、死人をよみがえらせる力が神としての本性から出るものであることを示すかのように。

◈ヨハネが記すラザロのよみがえりの様子は特に注目すべきものです。「イエズスは目を上げて話された。『父よ、私の願いを聞き入れてくださったことを感謝いたします。私はあなたが常に程の願いを聞き入れてくださることをよく知っています。私がこう言いますのは、この回りにいる人々のためで、あなたが私を遣わされたことを、この人たちに信じさせるためであります。』 そう言ってのち、声高く『ラザロ、外に出なさい』と呼ばれた。すると死者は…出てきた。」(ヨハネ11・41~44) イエズスが自らの力を使って、御父との親密な一致のうちに友人ラザロをよみがえらせたことが強調されています。「私の父は今日も働かれるのだから私も働く」(ヨハネ5・17)という言葉をここで確認できるのです。高間での最後の晩餐のとき、イエズスは御父との関係、すなわち御父と一体であることを弟子たちにお話しになりますが、それがすでに表明されていたとも言えるのです。

◈イエズス・キリストのうちに働く神としての御力は、人間世界を越えて広がり、自然の力をも支配するものであることを福音はさまざまな奇跡——しるしを通して示して

不変の教え

イエズスの御名によって

います。嵐が静められた場面は意味深い箇所です。「折りから激しい疾風が起こった」ので、恐れた弟子たちは眠っておられたイエズスを起こしました。「イエズスは起きあがって風を戒め、海に向かって『騒ぐな、静まれ』と言われた。そのとき風はやんで凪となった。(…) 弟子たちは大いに恐れ、『これはだれだろう、風も海もこの人に従う』と言い合った。」(マルコ4・37～41)

一連の出来事の中に奇跡の大漁があります。いくら試みても何一つ獲れなかったのですが、イエズスがお命じになり、その通りすると大量の魚が網にかかりました。(ルカ5・4～6、ヨハネ21・3～6参照) ガリラヤのカナで行なわれた「最初のしるし」もよく似ています。その時イエズスは給仕人に、水がめに水を満たし、ぶどう酒に変化した水を宴会係に持っていくようにお命じになりました。(ヨハネ2・7～9) 奇跡の大漁もガリラヤのカナで起こったことも、漁師である弟子、婚宴での給仕人という人間がそれぞれの役割を果たしていますが、奇跡的な結果は人間からのものではなく、行動をお命じになった御方、神としての御力をもってお働きになった御方からのものでした。それは弟子たちの反応からも明らかです。弟子たち、中でも特にペトロは、奇跡の大漁を目の当たりにして「イエズスの足もとにひれ伏し、『主よ、私から離れてください。私は罪人です』」(ルカ5・8) と言いました。神の秘義の翼に触れたと感じた時、ペトロのように、使徒たちも人々も心を動かされ、畏敬の念からくる恐れを抱いたのです。

◈ 御昇天の翌日、「使徒たちの行なう……不思議としるし」(使徒行録2・43参照) を目撃した人々は、みな同じ恐れを抱きました。使徒行録によれば、人々は「病人たちを道に運び出すほどになり、寝台や担架に乗せ、ペトロが通るとき、せめてその影に覆われようとした。」(同5・15) 使徒教会の始まりとなったこれらの「不思議としるし」は使徒たちの名によって行なわれたのではなく、イエズス・キリストの御名において行なわれました。これはイエズスの神としての力のもう一つの証拠でした。エルサレムの神殿の門で施しを請う足なえの男にペトロが言った言葉は印象深いものです。「『私は金銀を持っていない。だが私のもっているものをあなたにあげよう。ナザレトのイエズス・キリストの御名によって、歩きなさい』と言った。そして彼の右の手をとって起こすとすぐその足とくるぶしは強くなった。」(使徒行録3・6～7) また、エネアという名の中風の男にペトロが言ったことも思い出します。「『イエズス・キリストはあなたを治してくださる。起きて自分で床を整えなさい』と言うと、エネアはすぐ起きあがった。」(使徒行録9・34)

もう一人の使徒、パウロは、ローマ人への手紙の中で、「異教徒の中におけるキリストの使徒」として自らが行なったすべてのことを思い起こし、自分の唯一の真価はその役割において見出すことができると記しています。「キリストが異邦人を服従させるために私を用い、ことばと行動と、しるしと奇跡の力をもって、神の霊の力をもって行なわれたことのほか私はあえて言わない。」(15・18～19)

◈ 初代教会、特に使徒たちによる世界の福音宣教時代には、イエズスが約束されたように、「奇跡と不思議としるし」があふれていました。(使徒行録2・22参照) 救いの全歴史を通して、神の御計画にかかわる決定的瞬間に「奇跡と不思議としるし」は繰り返されてきました。旧約時代におけるエジプトの圧政からのイスラエルの「脱出」、モーゼに率いられ、約束の地に向かう旅の途上でも同様でした。神の御子の御託身において「時満ちたとき」(ガラツィア人への手紙4・4参照)、神の御業である「奇跡的しるし」は、キリストの神としての尊厳と御名への言及、従ってその真理と約束、命令、栄光への言及によって、新たな価値と新たな有効性をもつことになります。イエズスの御名において、使徒たちや教会の中の多くの聖人は「奇跡と不思議としるし」を行なってきたのです。奇跡は今日も行なわれています。その一つひとつに「人の子――神の子」の尊顔が描かれてあり、そこに私たちは恩寵と救いの賜を確認することができるのです。

霊的巡礼 ④
私的啓示について

★ 今日はポルトガルのファティマにある聖所について考えてみたいと思います。

御存じのように、聖母マリアが三人の子供の前に姿を現わされてから今年で七十年目になります。私自身も一九八二年五月十三日、世界各地から数限りない人々が目指して来るあの栄光に満ちたマリア聖堂に赴くことができました。ファティマでの徹夜の祈りの時に述べた通り、私は「ロザリオを手に持ち、マリアの名を口にし、慈悲の歌を心に秘めながら」聖所へと向かいました。

神の啓示は、それを完全に具現するイエズス・キリストにおいて全うされたのであるから、私的な啓示は公的な啓示に照らして判断されなければならないと、私は教会が絶えず繰り返す教えに従ってお話ししました。教会がファティマのお告げを受け入れたのは、それが福音の教えと一致するからです。聖母のお告げの核心は、祈りと回心への呼びかけであり、これこそキリストが福音の中で何度も繰り返されたことにほかならないからです。

★ 数々の不思議な現象が証明するように聖母マリアのファティマでの出現は一九一七年の出来事で、二十世紀にとっての言及点および光の源となっています。天の御母マリアは私たちの良心を揺り動かし、私たちに人生の本当の意味を示し、罪を悔い改めさせ、霊的な熱情をかき立て、心に神への愛と隣人への思いやりを育んでくださいます。マリアが来られたのは、悲しいかな、父なる神の家に立ち帰れと神の御子が呼びかけてくださるのに、私たちの多くは聞き入れようとしないからです。

ファティマの聖所から、聖母マリアは母としてのさし迫った願いを今日も新たに発しておられます。すなわち真理と恩寵への回心、特に赦しの秘跡と御聖体の秘跡、犠牲の精神を伴う、マリアの無原罪の御心への信心をすすめておられるのです。

★ 天の御母の声に耳を傾けましょう。教会全体が耳を傾けますように。全人類が耳を傾けますように。神の御摂理によって聖母は全人類の永遠の救いを望んでおられます。

ファティマの聖母を心から信頼し、私があの日御像の前で述べた奉献の言葉をもって、共に祈りましょう。

「現代の人々の心の中にたやすく根を下ろす悪の脅しに打ち勝てるようお助けください。……私たちを飢餓と戦争から、……人間としての生命に反する罪から、……憎しみと落胆から、国内及び世界の生活におけるあらゆる不正から救ってください。人間の心の中から神についての真実を消し去ろうとする試みから、神の戒めを踏みにじろうとする企てから、私たちを救ってください。もう一度この世の歴史の中で憐れみ深い愛の限りなき力をお示しください。御身の汚れなき御力がすべての人に希望の光を示してくださいますように。

『教皇様の声』 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 ■毎月 十日発行 ■定価 一部七十円送料四十円 ■一年予約八〇〇円送料五〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393